

新潟県の綿織物の盛衰

山崎光子
県立新潟女子短期大学

越後の織物の歴史は古い。正倉院には天平勝宝5年(753)に使用された麻布に「越後国久疋郡夷守郷、戸主肥人皆麻呂」の名がみえ、すでに庸布として織られていたことがわかる。麻織布はその後も越後布の名で、特に江戸時代に入ってから越後縮と称して喧伝され、夏期には欠かせない帷子の衣料として武士から町人まで広く着用されてきたが、江戸中期ころからは、木綿織物の普及、紬織物の需要の増大などに押され、天保改革の縮布制限令によって打撃をうけ、次第に衰退していった。麻織物産地は絹織物産地へと転換していくことになる。⁽¹⁾

越後の織物産地は、発祥時期の古さや規模の大小を別にすれば大きく二つに分けることができると思われる。いわゆる麻織物から絹織物へと転換した高級品指向の織物産地と農民を主体とする働く庶民の衣料を補った木綿織物産地で、前者は十日町、小千谷、塩沢、六日町、栃尾、五泉など、比較的山間部の豪雪地帯であり、後者は、亀田、小須戸、加茂、見附、長岡、葛塚、村松、吉田など、比較的平場の雪の少ない穀倉地帯である。

越後での木綿織物の発祥の時期は何時ごろなのであろうか。

わが国に木綿織物の広まったのは天正・文禄期(1573~1595)以降と云われており、また熱帯作物の棉は、近世初期では北緯37度以北では栽培不可能とされ、実際、木綿織物の主要生産地も関東以南にあり、それより北の越後の綿織物は時期的に当然遅れるものと思われる。

しかし、わが国で国内生産されたと思われる木綿の存在を示す最も古い資料が越後に関係している。即ち明応3(1495)年に越後の守護上杉房定の関銭に関する文書の中に「ミわた」の文字がある。これは絹の綿とは考えられないため「実綿」の字があてられる木綿とされており、朝鮮から伝えてくれた綿種による実綿説。また実綿のままでは販売したとは考えられないため国内産の木綿であるとする説⁽²⁾などがある。

実際に越後で木綿織物が織り始められた時期についての云い伝えの最も古いものは、元、南蒲原郡今町(現、見附市)の寛文年間⁽³⁾(1661~1672)である。しかしこれは隣接する安政年間(1854~59)に創始し「見附結城」で知られるようになった南蒲原郡見附(現、見附市)との、藩領の異なる二つの村の対抗意識から作り出されたもので、実際は見附町から触発されて興ったものであろうと現代では云われている⁽⁴⁾。

その見附における織物は、麻織物は自給用衣料の他にもすでに近世初期から「御用布」として村松藩に買上げられており、麻の栽培製織の盛んな地域であったが、木綿についての記録は正徳5(1715)年からみられ、このころすでに自家用綿布が織られていたらしい。その綿原料も、自家用であることからみて、地元で栽培されたと考える方が自然であり、越後の棉の栽培が比較的早い時期から始められていたのではないかと云われている⁽⁵⁾と云われている。

次に古いと思われる地域は中蒲原郡亀田町の綿織物である⁽⁶⁾。その発祥期は享保年間(1716~1729)とも云い伝えられているが少なくとも寛政年間(1789~1800)には袋津村を中心とする近郷の農民が、自家製の綿糸による木綿布を織って亀田の市日に持ち出している。したがって生産量は少なく品質も不ぞろいであったが実質を旨として織られ丈夫であり、更に低廉のため農家用衣料として年々需要を増し、品質も改良を加え信用を高め、文化5(1808)年には腰機から長機になるなどして次第に産地を形成していった。

以上のように越後の綿織物は、支配者階層と深くかかわりながら発達してきた麻織物と異なり、自家用麻織物の延長線上に自家用木綿布として農民の手で織られはじめたものとする。麻から木綿への転換をうながしたものは勿論一般的に云われてるように木綿の持つ特質、すなわち綿花から糸をとる方が苧績みより容易であること。麻より保温性に富むこと、染色しやすいことなどのためであろう。

現在、新潟県下では、多くの地域での市史、町史

の編さん事業が進行中であり、それらが一通り完了した時には、更に県内の綿織物の推移の過程も明らかになるであろうが、ここでは、見附、亀田以降の各木綿織地の発祥期の概略を、『北越機業史』⁽⁷⁾を主な資料として時代を追ってあげてみよう。

- 見附・正徳5年(1715)
- 亀田・寛政年間(1789~1800)
- 小須戸・享和元年(1801)
- 長岡・文化年間(1804~17)
- 葛塚・文政3年(1820)
- 吉田・天保年間(1830~43)
- 村松・天保3年(1833)
- 沼垂、水原・明治5年(1872)
- 加茂、新津、曾根・明治年代から(1868~)

これらの地は、特に吉田がそうであるように、やはり農家の婦女子の余暇の副業としてはじまったところが多いものと思われるが、亀田では文化年間に野州、足利から、見附は文政年間に下総、結城から、また葛塚は文政年間に大和から木綿織りの技術導入を試みている。また、加茂、新津のように文化年間から絹織物地であったところ、小須戸、長岡、沼垂のように地元の人の工夫により発展した地域などそれぞれの発展過程は多様である。

木綿織物の商品化は、北国の越後にとっては当然、原綿の不足を招来するが、見附、亀田などは、早い時期から問屋制家内工業の経営形態をとり、分業化し、原料糸も専門の糸商から購入している。見附機業では慶応2(1866)年から安価な外国製綿糸も経糸として用いており、亀田では明治15年頃から備後の、そのうち大阪から紡績糸を移入している。加茂でも明治22年頃に輸入の紡績糸が入っている⁽⁸⁾。そして織り上がった製品は地元のほか、東北地方を中心に、北海道や北陸地方にも販売されていった。

越後の木綿織物の地域別の種類と産額は、明治37年刊の『北越機業史』の「最

近の統計の結果」⁽⁹⁾によれば下記の通りである。

- ()内は木綿、絹綿交織物をあわせた産額。
- 見附・見附結城縞、小倉類ほか(45万反)
- 吉田・白木綿(70万反)
- 小須戸・木綿縞、夜具縞ほか(20万反)
- 白根・木綿縞ほか(8千万反)
- 加茂・木綿織ほか(12万反)
- 葛塚・木綿縞ほか(6万5千反)
- 村松・縞物ほか(3万8千反)
- 沼垂・木綿縞ほか(3万3千反)
- 長岡・結城木綿ほか(15万反)
- 今町・結城縞(2万反)

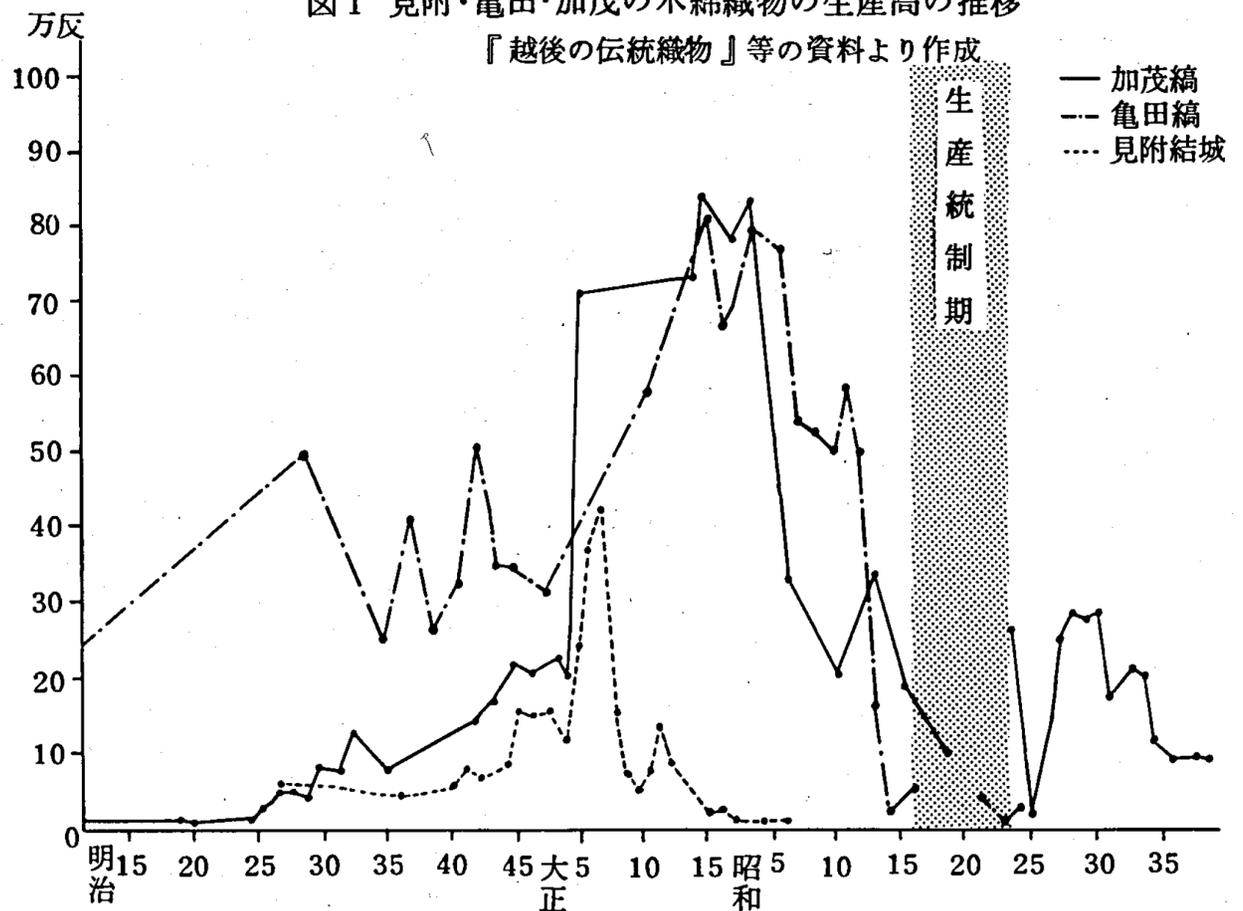
大正後期になると綿織物の種類に緋木綿や夜具地の名が見えるほか、輸出向けの各種綿織が加わる。大正12年の製品別の産地は次の通りである⁽¹⁰⁾。すなわち縞木綿は加茂、亀田、小須戸、見附、長岡、村松、葛塚であり、緋木綿は加茂、亀田、小須戸、六日町、塩沢、そして夜具地と織色木綿は小須戸、亀田、加茂、葛塚で、白木綿は三條、白根、吉田であった。その他輸出向綿織物は加茂、見附、長岡、村松、小千谷が産地となっている。

そして大正12年の新潟県内の各々の木綿織物の産額⁽¹¹⁾は、縞緋物266万点、夜具地76万点、無地物51万点、雑織753万点、計1146万点ほどであった。

明治から昭和にかけての生産高の推移を、見附、亀田、加茂の木綿織物を例にとって図示すると図1

図1 見附・亀田・加茂の木綿織物の生産高の推移

『越後の伝統織物』等の資料より作成



のようになる。明治末から大正期を中心に、軍需景気その他の理由で綿織物の生産が急増するようになるが、昭和期に入ると世界恐慌の余波などから次第に衰微し、また日華事変後は原料糸が供給されず綿織物の製織が不可能となり、人絹など他の織物に変らざるを得なくなった。第二次大戦の戦中、戦後の生産統制期の後、若干、復活した地域もあるが、新潟県の綿織物が農村の仕事着を中心とする衣料であったため、わが国の高度経済成長など時代の変革にともない綿織物の内容も変らざるを得なかった。

現在の新潟県では、⁽¹²⁾一貫した白木綿産地であった吉田が晒木綿、浴衣生地、ガーゼ布を織り続けている（昭和59年度、1048万 m^2 、70498万円）ほか、亀田で高級婦人子供服地（綿織物は862 m^2 、524183万円）を、加茂でも民芸品用縞木綿など特殊な分野（7万 m^2 、862万円）の開拓に努力しているなど、新潟県内の綿織物は細々ながらも存続している。

参 考 文 献

- (1) 山崎光子「伝統の織物」『新潟県風土記』350頁
新潟県書店組合 昭和54年
- (2) 新潟県見附市教育委員会『見附市史』上巻269～270頁 昭和56年
- (3) 内田慶三、安藤鑄『北越機業史』165頁目黒書房
明治36年
- (4)(5) 『見附市史』上巻280～281頁、279頁
- (6) 山崎光子「亀田縞」『新潟県大百科事典』471頁、
新潟日報事業者 昭和52年
- (7) 『北越機業史』123～175頁
- (8) 土田邦彦『越後の伝統織物』129～169頁 野島出版、昭和55年
- (9) 『北越機業史』181～183頁
- (10) 日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治、大正編』第23巻、903～904頁、大蔵省印刷局発行、昭和35年
- (11) 新潟県染織同業組合編『新潟県の染織』4～5頁、昭和2年
- (12) 新潟県繊維協会『新潟県産地概要』14頁、昭和61年